



岩 波 文 庫

4675—4677

フランスの内乱

マルクス 著
木下半治 訳

岩 波 書 店



昭和二十七年八月五日 第一刷発行
昭和四四年五月二〇日 第二三刷発行

フランスの内乱

定価★★★

訳者

木^{きの}

下^{した}

半^{はん}

治^じ

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地
白井倉之助

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋三ノ三 株式会社

岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・田中製本

岩 波 文 庫

4675—4677

フ ラ ン ス の 内 乱

マ ル ク ス 著
木 下 半 治 訳



岩 波 書 店

亡き友野呂榮太郎君に獻げる

譯者序

一、本書は Karl Marx, *The Civil War in France* (Address of the General Council of the International Working-Men's Association, to all the Members of the Association in Europe and in the United States) を譯したものである。譯者は、もちろん、國際的慣例に従つて、この「フランスの内亂」に先行する二つの「宣言」および「エンゲルスの序文」を附隨させることを忘れなかった。

一、一八六四年九月に、始めてプロレタリアートの國際的結合體である「國際労働者協會」(第一インタナショナル)が成立した。マルクスはその中心的指導者として活躍していたが、一八七〇年七月十九日に、普・佛戦争が勃發した。同二十三日に、インタナショナル總務委員會は、マルクスの手になる第一宣言を發して、この戦争に對する自己の態度を明かにするところがあった。九月一日に、ナポレオン三世がセダンに降服するや、同四日に、パリに共和制が宣布せられた。この時、インタナショナル總務委員會は、同じくマルクスの筆になる第二宣言を發した。

一、三月十八日に、パリ・プロレタリアートは、首都をプロシヤ軍に賣ろうとするブルジョアジーの陰謀に奮起して、パリ・コミューンを布告した。これぞ即ち歴史上最初の労働者政府である。このパリ・コミューンが、七十二日にわたる惡戰苦闘の末、五月二十八日に悲惨な最後を遂

げるや、その砲煙の未だ消えない三十日に、既にマルクスは、インタナショナル總務委員會の前に、その第三宣言を讀んでいた。コミューン最後の堡壘ヴァンセンヌ（但しこれは現實には戦闘に加わらなかつた）の開城（二十九日）からみれば、實にその翌日のことである。この第三宣言が、「フランスの内亂」と題されて、同年七月上旬にロンドンから公刊された。本書の中心をなすものは、即ちこれである。

一、エンゲルスの緒言は、エンゲルス自らもいう如く、一八八一年に、「内亂」のドイツ版出版に際し、特に彼の書き下ろしたものである。「内亂」とともに、マルクス主義政治文獻として、重要視すべきものである。これに關するシャルル・ロンゲ（マルクスの女婿で、マルクスの唯一の孫ジャン・ロンゲの父）の訂正は、フランス版「内亂」の附録から採擇したものである。

一、附録の「パリ・コミューン資料文書集」は、一九二五年に Librairie de l'Humanité から刊行された *La Commune de Paris* (Textes et Documents Recueillis et Commentés par Amédée Dunois) を譯したものである。これは編者デュノアもいう如く決してパリ・コミューンの文書を全部網羅したものではないが（譯者の手許にも、これに洩れた文書が相當集まつてゐる）、コミューンの事蹟・方向を示す主要なものは、大抵收められている。マルクスの批判と對照して讀むと、なかく興深いものがある。

一、パリ・コミューンの歴史的意義ならびにその教訓、その成立事情、その鬭争、その敗北等については、譯者は書きたいことを山ほどもっている。が、ここでは遺憾ながら餘白がない。譯

者は、讀者諸君が紙背に徹するの眼光を以て、マルクスの分析を讀まれることをひたすら希望する。ただ一言するならば、パリ・コミューンは最初の労働者政府として、今日のソヴェート國家形態の先驅であつたということである。ソヴェート國家の組織、ソヴェート權力の維持——特に所謂プロレタリアの獨裁の實際について、レーニン以下の建設者がいかに多くこのパリ・コミューンの經驗から學ぶところがあつたかは、人の知るところである〔この點についてはレーニン「國家と革命」第三章、パリ・コミューン（一八七一年）の經驗——マルクスの分析、N. Lénine, *La Commune de Paris* (Deux articles et un discours) を参照のこと〕。従つてコミューン戰士は、いまや世界プロレタリアートの親愛な先驅者として懷しまれている。コミューン戰士の最後生存者であつたかのカメリナ (Louis Camélinat, 一八四〇年九月生れのブロンズ工で、コミューンの造幣局長官。一九二〇年の例のトゥールーズの分裂大會で第三インタナショナルを支持し、その後は國際會議における人氣者であつた) が、一九三二年三月、齡九十二で死するや、その葬儀（三月十日）に一二〇、〇〇〇のパリ労働者が參列して彼の死を惜んだことは、世の記憶に新たなところであらう。

一、次ぎに、パリ・コミューン史を繙いてわれ／＼の胸をうつことは、婦人労働者の果敢なことと、コミューン敗北後の「流血週間」（五月二十一日—二十八日）がいかに悲慘を極めたかということである。これは所謂反革命において勝利したブルジョアジーがいかに振舞うかを示す一の適例である。ヴェルサイユ軍の損失、戦死者八九〇名、負傷者六、四二〇名に對して、コミュー

ン側の死者は三〇、〇〇〇名以上に上り、負傷者は數知れず、被逮捕者三八、五六八名、そのうち一、〇五八名は婦人、六五一名は七歳乃至十三歳の子供であるというから驚くではないか。

一、本書はもと友人野呂榮太郎君が「内亂」を譯し、譯者は附録のみを提供する筈であったのだが、この友人が周知の事情によって不幸にも急逝したので、譯者が單獨で出すの止むなきに至った。夙くに出ずべかりし本書の刊行が遅れたのは、こういう事情に基くのである。

一、本書は R. W. Postgate の編纂したイギリス版 (The Labour Publishing Company, Ltd., London, 1921. 但し、エンゲルスの緒言なし) を臺本とし、Charles Longuet 譯のフランス版 (Librairie de l'Humanité, Paris, 1925)・A. Conrady 編纂のドイツ版 (Buchhandlung Vorwärts, Berlin, 1920. 但し、第一・第二兩宣言なし) を参照して譯されたものである (但しエンゲルスの序文のみはドイツ版を臺本とする)。譯者はなお翻譯に當って、希望閣版および山川均氏の邦譯をも參照した。

一、マルクスの「フランスの内亂」の原文については、それがドイツ語であるという説をなすものがある。現に譯者も、最初、野呂君とこの仕事を始める時には、この點について争つたものである。しかし、本書は、最初、インタナショナルの宣言として發表されたものであるから、英語で書かれたことに間違いはない。が、なお疑い深い人々のためその證據を援用するならば、本書の臺本の序文においてポストゲートはこういつている――

「これらの宣言は、丁度いまに印刷されている通りの英語を以て、マルクス自身によって書か

れたものである。もちろん、彼の同僚たちは、彼の文章を少しは訂正したであろう、というのは、彼の英語は時々間違ふことがあったから」と（同書一―二頁）。

何故かようなことをわざ／＼断つたかについて、ポストゲートは、更に註している――

「私がこの點をハッキリさせておきたいというわけは、現に私を訪問したイギリスのマルクス主義者たちが、私に向つて、貴方の印刷されたのは『一體、何の翻譯か』と質ねたりするからである。そして現在、私は、シカゴのカー（*Meier*）から出版されたもので、本書と同一の内容（但しアメリカ綴りである點と、多くの誤植のある點とは違つてゐるが）をもちながら、しかもわざ／＼その表紙の上に『ベルフォート・バックス（*Belfort Bax*）によるドイツ語より
の翻譯』！と断つてある版をみたのである」と（前掲、二頁、脚註1）。

第二の證人として、ジャム・ギョームの「インタナショナル」をかりる。その第二卷において彼はいつている――

「人々の知る如く、マルクスは、コムイーン崩壊の數日後に、インタナショナル總務委員會の名によつて『フランスの内亂』と題して、一八七一年五月三十日の日附のある、英語で書いた小冊子を公刊した。……私は英語の原文から……を譯してみる……」と（一九一頁）。

第三の證人は「社會主義辭典」の著者シャルル・ヴェレック（*Charles Véreque*）――

「この最後の表題（『フランスの内亂』）はドイツ譯……にも採擇せられた……」（二〇〇頁）。第四の證人は、シャルル・ロンゲである。彼は、「内亂」フランス版附録においていう――

「……このドイツ譯は、もし私の記憶にして誤りがなければ、その全部ではないまでも、その大部分が、エンゲルスの勞作であつた。……彼（マルクス——譯者）は——それは實に尤もな次第ではあるが——自分のものを自分自身で翻譯することをあまり好まなかつた、しかもこの場合にあっては、英語の原文が雅致と獨創性にと富んだ名文であつただけに、それはなおさら有難くない仕事であつたのだ」と（フランス版、一一三頁）。

以上で、「内亂」の原文が英語であることがハッキリしたと思う。なおイギリス版には前記のカー版のほかに *The Paris Commune* (New York Labour News Company, 1920), *The Commune of Paris* (The Twentieth Century Press, London) 等がある。ポストゲートの版は、一八七一年に E. Truelove によって刊行され、ポストゲートの *Revolution 1879—1906* に收録されたのを、單獨に纏めて出版された、最も信憑するに足るテキストである。また「パリ・コミューン」という表題であるが、元來マルクス自らの附した表題は、「フランスの内亂」というのであつた。しかるに、ロンゲが一九〇〇年にそのフランス版を刊行する時、彼は世を憚かつて、これに「パリ・コミューン」という名を附したのである。これはコミューン敗北を期として、いかにフランス・プロレタリアートが沈潜状態にあつたかをよく説明している。

一、イギリス版、フランス版、ドイツ版にはそれ／＼編者乃至譯者の序文や附録などがついてしたが、それらは譯者の裁斷を以て殆んど全部省略することにした。またこれらの諸版は、三つの宣言とエンゲルスの序文との順序についても、それ／＼違つていたが、大體においてポストゲ

1トのそれに従うことにした。イギリス版「内亂」の文章は區切りが長くて譯し難く、フランス版は短かく切つてあつて分りよかつたが、この點については、イギリス原文に忠實に従つた。但し本書は「宣言」であるから、譯文については、その積りで、多少元氣のよい字句を使用した積りである。なお譯註は、特に斷つてない限り、全部譯者のものである。譯者の註は、出来るだけ事實を調べて本文の理解を容易ならしめることに努力した。これは單なる「譯註」ではなくて、相當研究的なものにした積りである。次に、Civil War (Guerre civile, Bürgerkrieg) という語は、譯者としては「市民戰」と譯すことにしているのであるが、表題だけは慣例に従つて、「内亂」とした。「ハ」は譯者の補註であり、「。」なる記號が「;」を移したものであることは、例の通りである。

一、パリ・コミューンに關する文獻にはいろいろあるが、最大の傑作は何といつても Lissagary, *Histoire de la Commune de 1871* (Librairie du Travail, 1896, 1929) である。この書物は讀んで實に面白い。これはいつか是非とも譯出する機會をもちたいと考えている。次に寫眞集で一番内容豊富なのは Armand Dayot, *L'Invasion, le Siège, la Commune* (Ernest Flammarion, Paris) である。コミューンに關する大抵の寫眞は、この寫眞集が種本だと思つてよい。なおパリ・コミューンの文獻については、譯者が日頃から調査しておいたものがあるので、附録にでもして發表したいと考えていたが、あまりにページが多くなるから……ということであつたので、遺憾ながらこれは割愛することにした。

一、最後に、歴史的事實や譯語について御教示を頂いた東大教授宮澤俊義兄、同今井登志喜先生、慶大教授戸川秋骨先生、その他の諸氏に心からなる感謝を捧げる。

一九三五年三月八日

譯者

改訂のことば

一、舊譯「内亂」を世に送ってから、十六年を経た今日、これを改訂する機會をもち得た。敗戦という空前的な出來事を含むこの十六年の時間の差は、本書に對して、まず不快な伏字を追放することを可能ならしめた。舊版の「友人N」の本名を明かにし得たのも、またその餘惠である。

一、改訂版は、そのほか、新假名づかいにし、全體にわたって、表現をやや柔げた。また「内亂」フランス新版 (Éditions Sociales, 1946)・Lissagaray (戦後 Librairie Marcel Rivière の新版あり) その他によって、譯註を若干増補したほか、附録の資料集に關して、*Journal officiel de la Commune* (publié par la Revue de France), 1871, *Journal des Journaux de la Commune, Tableau résumé de la presse quotidienne du 19 mars au 21 mai 1871* (Garnier), 1872 及び *La Commune de Paris. Actes et Documents. Episodes de la Semaine sanglante*. Préface de G. Zinoviev (Charté), 1921 を参照、補訂した。また大月書店版も参照した。特に *la Revue de France* 版は大いに役立つところがあった。

(1) 一九五三年の *Éditions Sociales* 版はマルクスの新聞寄稿の抜萃その他の資料を含んでいて貴重であるが、本譯書にはこれを取入れる餘裕がなかった(一九五八年五月二十八日追記)

一、新舊兩版には、以上の如き違いがあるが、しかし、大體において、舊版の面目はそのまま

生かされたといってよい。伏字以外は、舊版をそのまま出しても、そう恥ずかしくはなかった積りである。

一、パリ・コミューン研究については、近着（といっても一九三八年刊行であるが）の *Histoire des Révolutions* (De Cromwell à Franco), (NRF, Gaillimard) に *Origines de la Commune*, par Lucien Descaves という興味ある章が收められている。この筆者は、パリ・コミューン文獻として、Lissagaray, K. Marx, *Journal officiel* の三者を擧げているのみである。以て Marx とともに Lissagaray の勞作の重要な地位を知り得るであらう。

一、序ながら、パリ・コミューンに關しては、前掲 G. Zinoviev 版と N. Lénine, *La Commune de Paris*, Trotsky, *La Commune de Paris* を集めて本邦譯者の譯出したもの（一九三一年、春陽堂版）があることをこの際附記しておきたい。

一九五一年十二月十日

譯者追記

目次

譯者序	五
改訂のことば	一三
國際勞働者協會總務委員會の戦争に関する宣言	一九
一八七〇年七月二十三日の第一宣言	一九
一八七〇年九月九日の第二宣言	三〇
國際勞働者協會總務委員會の宣言（フランスの内亂）	四七
ドイツ版「内亂」第三版に對するエンゲルスの序文	一五一
エンゲルスの序文の若干の點について	一七五
シャルル・ロンゲ	一七五